カトリック 高松教区報

深堀司教追悼号

2009年10月23日（第132号 特別号）
発行所　カトリック高松司教区 広報委員会
〒760-0074 高松市桜町1-8-9
TEL 087-831-6659　FAX 087-833-1484
Email
教区：catholic-takamatsu@takamatsu.catholic.ne.jp
広報：tk-koho@mxi.netwave.or.jp
生涯養成：yosei@takamatsu.catholic.ne.jp
WEB http://www.takamatsu.catholic.ne.jp/

深堀司教ご逝去

２７年間 高松教区を司牧

荘厳に葬儀ミサ
信徒ら献花に長い行列

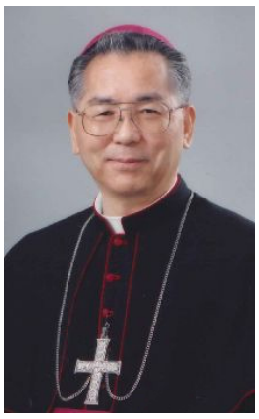
桜町教会

九月二十四日午後三時二十七分、熊本にあるイエズスのみ心病院ホスピスにて前高松教区長深堀敏（さとし）司教が腎臓癌のため帰天した。享年八十四歳。

同司教の葬儀は、高松教区桜町司教座聖堂に於いて、二十六日午後六時通夜式に続き二十七日午後一時から教皇大使をはじめ各教区司教、修道会、司祭、親族、信徒ら五五〇人余りが参列し、しめやかな中にも荘厳な葬儀ミサが執り行われた。高見三明長崎大司教が説教を行い、岩永神父の弔辞に続く溝部司教の喪主挨拶で締めくくられた。聖歌隊による聖歌の中、告別式には多くの信徒、関係者による献花の長蛇の列が続いた。最後に、参列した全司祭の〝サルベレジーナ〟の斉唱に送り出されて葬儀を終えた。

高松教区での最後の公式ミサにて

高見大司教の説教



まず、溝部司教様はじめ高松教区の神父様方、助祭、男女修道者、信徒の皆様方、また御遺族の皆様、友人の方々に、心より哀悼の意を表し、お悔やみを申し上げます。

長い司祭生活、そして司教生活を終えられ、誰もが通らなければならない道を通って、深堀司教様は御父のもとへ帰られました。私たちは司教様に感謝を込めて、永遠の安息を心からお祈りしたいと思います。私は、個人的には深堀司教様をほんのわずかしか存じ上げませんし、ほんの一面しか伺っておりませんが、私なりに感じたことをお話ししたいと思います。

福岡で、教区経営の泰星中学高校副校長をしておられた当時の深堀司教様を訪ねたことがあります。広い空教室があり、その教室の隅っこに畳を四枚ぐらい敷いて生活しておられました。私は驚きました。司祭が教室の隅で寝起きをしておられるのです。机も生徒が使っていたような小さな机だったと記憶しています。清貧という言葉がありますが、何の苦にも思っておられず、にこやかに、そういう生活を受け入れておられました。大変驚かされ、学ばされました。特に音楽がお好きだったようですが、とても清貧に、質素に謙遜に生きておられました。

私がまだ神学生の頃、司教様は福岡の大神学校で講義もしておられました。わかりやすい講義だったと記憶しています。また司教館に長く勤めて、教区新聞の編集を長く務められました。いわゆる小教区で、直接責任を持って働かれるということは無かったようです。それでも、信徒の視点で、どのように信仰を生きてもらうかということを、常に考えておられたのではないかと感じます。牧者としての心を、いつでもどのようなときにも持っておられたと感じます。

教区発展に心砕かれた
司祭養成に力、しかし問題も

もう一つはこちら高松の司教になられてのことですが、こういう小さく限られた四国、少ない司祭団、信徒の中で教区をいかに発展させようかと、おそらく毎日心を砕かれたと思います。

そういう中で大きな問題の一つは、司祭召命だったように思います。御摂理によるといいましょうか。新求道共同体の皆様方と共に司祭を養成されて、たくさんの実りが与えられたと思います。司教様としては、教会を作るためにはなんとしても司祭が必要だと。しかし、なかなか四国では育たない、生まれないという現実に直面して、神様のお恵みを願ったと思います。そして、その恵みが叶えられたと思います。しかし残念ながら、その一方で色々な問題もあったように聞いています。それにしましても、この召命の問題は今でも勿論続いていますし、深堀司教様も気がかりではないかと思います。でも見守っていただきたいと思います。

後継者の溝部司教様になられましてから、高松教区は新しい局面を迎え、将来に向かって新たな発展を試みていると感じています。皆が一つになり心を一つにして、神様のお恵みに答えながら、教会というのは成長していくものだと思います。キリストが頭であり、その頭から、皆、命をいただいて、お互いに助け合いながら、キリストの体を形作っていく、これが教会の姿であります。今日の福音の言葉そのものを生きられた深堀司教様は、そういう教会作りを目指して最大限の努力をされたと思います。そういう意味で心から敬意を表し、また感謝申し上げたいと思います。

しかし、これから先、高松教区はまた溝部司教様と共に歩み続けなければなりません。私たちはこの深堀司教様の残された素晴らしいものを引き継ぎ、これからも生かしていかなければならないと思います。一方、私たちは司教様に許しを請わなければならないことがあるかもしれません。あるいは、司教様を許す事柄もあるかもしれません。そういう和解する心を、私たちの願いとともに神様に捧げ、深堀司教様が神様のもとで平和と喜びの内に憩うことができますようにお祈りしたいと思います。そして、これからもこの高松教区の歩みを見守り、高松教区の皆さんのためにお祈りしてくださるようにお願いしたいと思います。

溝部脩司教

病床で最後の時に口伝てに遺された遺言がある。最後に述べられたが、最後の日々自分に言い聞かせた言葉と思ってもよい。おそらく彼の万感の想いが込められているものであろう。「神様に捧げたいのちですから、勝手に執着しな

「神様から与えられた命捧げる」
病床で最後に残された遺言

いで、神様から与えられたいのちを全て捧げること」。

私に渡された遺言の文章は「捧げる事が出来ますよ」で結ばれているが、これでは意味は通じない。多分、「こと」で結んだほうが司教の想いをしっかりつかむことが出来る。

深堀司教在位二十七年間、蜜月のような時代、山あり谷ありの時代を経た波乱万丈の人生を容易に想像させる。その中で得た結論であり、私たちに遺す遺言となったのであろう。「神様に捧げたいのちですから、勝手に執着しない」。まさにその通りだ。自分の思い通りに何でもしていこうとする、これが思い上がりである。謙虚な司教の面影と重なって見える句である。「神様から与えられたいのちを全て捧げる事」、まさに至言である。自分の人生を捧げつくすことが大切なのである。

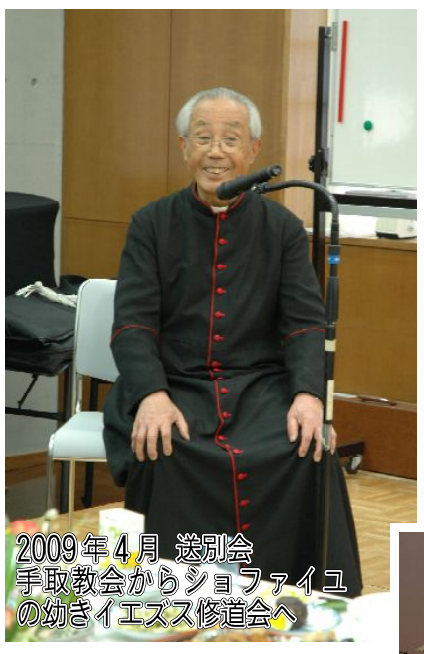
隠棲しても尚、牧者として教会への奉仕に黙々と励む姿は何よりの教訓であり、私たちの励みである。深堀司教が最後まで望んだのは、高松教区の一致であり、再生であると信じて疑わない。これが実現するには、自分を捨てた無私無欲の人が必要なのである。あるいは完全な信仰に生きる人が求められている。合掌・・・

深堀司教様　数々の思い出

2004年７月　溝部司教着座式

2004年７月
高松教区での最後の公式ミサ

2002年
復活祭パーティー


2009年４月　送別会
手取教会からショファイユ
の幼きイエズス修道会へ

病床で赤ちゃんを祝福する（旅立つ10日前）

2004年11月
四国知牧区100周年

2004年７月
熊本出発の朝

2002年８月
聖母被昇天祭
初聖体の子供達と

1991年８月
ポーランドWYD
教区の青年に囲まれ

2002年９月
教区の日　司教叙階銀祝

2004年11月
四国知牧区100周年

2003年４月　聖金曜日

1996年５月　三本松ルルド祭

教区のために働かれたことにお礼

岩永千一神父の弔辞

司祭を代表して弔辞を述べるようにと溝部司教様が私におっしゃられましたので、お別れの言葉を述べさせていただきます。

今から三十二年前、一九七七年、深堀敏司教様がこの教会で司教に叙階されました。その時は、大阪の田口大司教様が司式されました。数多くの司教様が参列されていました。先代の田中英吉司教様も入院中でしたが、それをおして参列されました。その時、私が司祭を代表して、お祝いの言葉を述べさせてもらいました。しかし、今その私がお別れの言葉を述べるというのは、痛恨の極みであり、悲しいことです。聖書のことばにあったように、「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽い」とイエズス様はおっしゃいました。司教様、皆様にあてはまるかも知れませんが、深堀司教様にあっては荷は軽いどころではない。重い荷物であったと思います。司教様が二十七年間私たちのために尽くしてくださった事は、天の御父だけがよくおわかりだと思います。私は小豆島に四十年程いますが、高松に来ると、司教様は「おお友よ、遠方より来たか、また楽しからずや。」とおっしゃって笑顔で迎えて下さいました。ありがたいことでした。

さて、二十七年間の司教の任期を終えて、ただ今の溝部司教様が着座されました。その着座式には、福岡の松永司教様もおみえでした。松永司教様は、私に「司教様は、ご自分の故郷である福岡で少しお休みになられたらどうですか。」とおっしゃいました。その時「三年間私がお世話しますよ。」と不思議なことをおっしゃいました。なぜ三年間なのか、わかりませんでしたが、その三年が経つ前に、当の松永司教様は神様のみもとに旅立たれました。その時「司祭の死は突然来る」という言葉を私は思い出しました。松永司教様は、熊本の手取教会に司教様が住まわれるように用意されました。私の小神学生時代、熊本の幼きイエズス会修道院には、私のいとこがシスターでいました。当時私は目を患って、そのシスターの世話で修道院近くの病院に入院していましたが、神学生なので手取教会には毎朝のごミサに行っていました。電話でそのことを申し上げると、司教様は「毎朝、その修道院にごミサに行っているよ。」とおっしゃられました。私は「そうですか、しかし冬は寒いでしょ。もう八十歳ですよ。風邪を引かれたら大変です。タクシーを雇って行かれたらどうですか。」と申し上げました。後で修道院の方で手配して、司教様の送り迎えをしてくださったそうです。

それから、深堀司教様が高松で住めるようにと、溝部司教様が高松に一軒家を用意されたと聞きました。私は溝部司教様に「それは本当によかったですね。」と申し上げました。ところが、深堀司教様は病状が進み、そうこうしているうちに、今週西川師から電話があり、「溝部司教様と、熊本にお見舞いに行ってきました。深堀司教様はだいぶ弱っておられ、いつ天国に行ってもおかしくない状態です。」とのことでした。私は「そうですか。」と答え、司教様のよい臨終のお恵みを願ってロザリオを唱えていました。また電話が来て「司教様は、今日の午後の三時二十七分に天国に行かれました。」とありました。二十七年間司教様が担われた苦労は軽いどころか、重かったと思います。「それは人間的にみれば重いかもしれないが、私の助けがあれば軽くなるではないか。」とイエズス様はお答えになると思います。

私は、司教様が熊本に行かれてからは一度もお会いする機会に恵まれませんでしたが、この二十七年間の長きに亘って、高松教区のために誠心誠意お働きになられたことに、心からお礼を申し上げたいと思います。私も年ですから、そう遠くない日に神様からお迎えを受けるでしょう。その時、司教様は「おお友よ、遠方より来たか、また楽しからずや。」とおっしゃるに違いありません。ここにお別れの言葉とさせていただきます。

深堀司教様をしのんで

あなたは戦いを立派に戦いぬきました

松永洋司神父

深堀司教様が亡くなった九月二十四日は、田中英吉司教様の後任として司教に叙階された記念日の翌日でした。深堀司教様は叙階以来、この小さな教区の運営にご苦労をなされました。そのご苦労に今、感謝したいと思います。深堀司教様がこの教区に着任されたころは、第二バチカン公会議が終わって教会刷新に向かって走っていた頃でした。司教様は教区内で対話を進め、若者たちや「いばらの冠」のキャンプなどにも顔を出され、励まして下さいました。深堀司教様の支援を受けて、誰もが前へと進んでいました。私事ですが、高知の江ノ口教会を、福者殉教者・田中夫妻に捧げたいと願ったところ、身近な夫婦としての良い模範になると、喜んで了承して下さいました。また、この春、こちら高松に来られるとの話で、お目に掛かれると思っていましたが実現せず、叶いませんでした。

親しい人との別れは誰にとっても辛いものです。それはイエズス様の弟子たちも同じでした。別離を告げるイエズス様の言葉に不安を募らせている弟子たちに「心を騒がせるな」と呼びかけられます。そして「あなた方を孤児にはしない」と言われます。弟子たちはこのイエズス様の言葉に慰められます。「一人にはしない、一緒にいる」こう言って弟子たちを励まされます。また、「私は道、真理、生命である。私を通らなければ誰も父のもとへは行かれない」とおん父への道を示します。イエズス様は永遠のいのち、復活、救いに与るための道を示して下さいました。私たちもイエズス様を通って永遠の命へ至ることが出来ればと思います。パウロは「私は戦いを立派に戦いぬき、決められた道を走り通し、信仰を生き抜きました。今や義の栄冠を受けるばかりです。」と愛する弟子ティモテへ書き送っています。深堀司教様もまた決められた道を走り通し、イエズス様を通っておん父のみもとに迎え入れられました。ヨゼフ深堀司教様を、主のみ手に委ねて祈りたいと思います。

「主が深堀司教様の生涯を受け取って下さり義の栄冠を授け、永遠の命と安息を与えて下さいますように。アーメン」

命燃やし尽くされたそのご生涯に尊敬

徳島教会　高田芙美

深堀司教様、そちらはいかがでしょうか？笑みを湛えたいつものお顔がさらに輝いておられることでしょうね。「神は人の目をぬぐわれ、死ももうなく、悲しみも叫びも苦労もなくなる。前のものが過ぎ去ったからである」。（ヨハネ黙二十一・四）

長い間、私たちの為に耐えがたい重荷を負いながら、牧者としての務めを果たしてくださいましたことを深く感謝申し上げます。誠実に慈父のように。

真に司教様は私にとってそのようなお方でした。黙想会ではその深い霊性で私たちを導かれ、キャンプには必ずおいで下さって徳島のこんな小さな群れを慈しんでくださいました。思い出は数限りなくありますが、懐かしいお方を天についてお送りすることになり、今はまだ悲しみに沈んでいます。

五年前、溝部司教様の着座式の時、岩永神父様が熊本へ行かれるという深堀司教様に「司教様、最後にはあなたのお墓はここにあるのですよ。教区民の皆様よく解っていますか」とお別れのご挨拶の中でおっしゃいましたが、そのとおりになりましたね。「よくお帰りくださいました」と申し上げます。溝部司教様も、深堀司教様の晩年はこちらでと用意をされていたと聞きました時は、そのお心遣いを嬉しく思いました。欲を言いますと、生前にほんの少しだけでもこちらにいていただきたかったと残念に思っています。

最後に「自分のいのちより神さまのみ旨を考えます」とおっしゃっていのちを燃やし尽くされた深堀司教様のご生涯を深く尊敬申し上げますとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

これからは天国で私たちを見守り、執り成し、励まし続けてくださいますようにお願い致します。

いつもにこやかに優しく

郡中教会　寺尾築子

深堀司教様のご逝去の報に接し、わたしの心の中に浮かんできたのは、ローマやルルドにご一緒させていただいた時の優しいお姿です。トレビの泉では「ここでアイスクリームを食べておかないと食べるところがないよ」と言ってくださり、ローマに着いたばかりで緊張しているわたし達の気持を解かしてくださったものでした。

二十七年間のご在任中、わたしの記憶では郡中教会には、四回ほど来てくださったように思います。いつでもにこやかに、優しく信徒一人一人にお声を掛けてくださって、話を聞いていただきました。その話が何かビックリしたり、うれしい話だと「ほう」といって目を丸くしてじっと相手の顔をみつめられてからニッコリされていました。

そんなお姿しか存じあげないわたしに、色々と深堀司教様のお苦しみが耳に入ってくるようになり心を痛めておりました。

立派なお志を持ちながらも「司祭召命」という大切なことが思うようには進まなかった、それはわたしたち高松教区の信徒一人一人の責任でもあったはずなのに、お一人で背負われた。いいえきっと主と共に背負われていたのではないかと思います。

高松での最後のミサのとき、「ほう」といつもの笑顔で郡中教会から参加したわたしを喜んで迎えて下さいました。

あの時がお目にかかった最後になりましたが、聖徒の交わり、罪のゆるし、からだの復活、永遠の命を信じるわたしには、今も、「主のみ旨」にと高松教区のためにとりなして下さっている深堀司教様と親しく交わることが出来たことに感謝いたしております。

深堀司教様、ありがとうございました。又お会いできる日まで。

高松教区名誉司教 深堀敏司教の略歴

1924年（大正13年）10月8日　長崎に男8人・女1人の9人兄弟姉妹中、3男として生まれる。
1937年（昭和12年）3月　北九州市立戸畑小学校卒業
1942年（昭和17年）3月　福岡市・私立泰星中学校卒業
1942年（昭和17年）4月　福岡カトリック大神学院予科入学
1949年（昭和24年）3月　カナダ・モントリオール大学神学部入学
1951年（昭和26年）6月　同神学部卒業
1951年（昭和26年）9月　同大学大神学院入学
1951年（昭和26年）12月22日　司祭叙階
1954年（昭和29年）6月　同大学院終了
1954年（昭和29年）9月　カトリック福岡司教館勤務
1970年（昭和45年）4月　福岡・私立泰星高等学校（副校長）
1974年（昭和49年）4月　福岡市カトリック浄水通教会（主任司祭）
1975年（昭和50年）8月　熊本市カトリック帯山教会（主任司祭）
1977年（昭和52年）9月23日　司教叙階、高松教区司教に任命
2004年（平成16年）5月　高松教区司教引退
引退後、福岡教区・手取教会で生活
2009年（平成21年）9月24日　午後3時27分逝去

教会のため生涯捧げられた

桜町教会　清水　昭

故ヨゼフ深堀敏司教様が私たち信者を神様の道へと教え導いて下さったばかりでなく、四国と日本の教会のために生涯を捧げられた事に心から感謝いたします。私は高松司教区事務局に四十年間働かせて頂きましたが、十一年間は深堀司教様のおそばで仕事をさせて頂きました。その間、司教様が研修会や信徒使徒職協議会の会議等で各地へお出かけになる時は、度々車の運転をし、ご一緒させて頂きました。出発するとすぐ司教様の先唱でロザリオを唱え会議等の成功と実り、そして目的地までの安全を願いました。その車内で日本の教会の働きや、教えに対する考え方などをお聞きした事が懐かしく思い出されます。他の神父様方もそうですが、深堀司教様の説教は前もって当日の福音から想を練って、順序立てて話されるので、「今日のお説教は良かったね」と家内と話し合ったものです。

右から深堀司教、岩永神父、清水氏

私事になりますが、深堀司教様の司教叙階式の折、私は体調を崩して入院中でした。式の二、三日後だったと思いますが、司教様は私の病室までお見舞いに来て下さいました。また事務局を退職する原因となった心臓疾患で入院した時にもわざわざお見舞いに来て下さいました。大変有り難く感謝しています。本当に嬉しく心に残っています。

司教様のご冥福を心からお祈りしています。

笑顔で付き合って下さった深堀司教様

江ノ口教会　宮本匡士

七十年代、世の中と同じ様に高松教区も信徒会と使徒職団体が信徒使徒職協議会を組織し、教区大会や信徒研修会を開催したり、教区高校生会を中心とした「いばらの冠」、教会学校教師会など活発に運動を展開していた。七十七年に司教様は四国の自然（松と海）の中「真理のことば・救いの福音」宣教が始まりました。江ノ口教会は、四旬節や二日間黙想会にすぐ司教様を呼びました。ボランティアビューロー完成、八十四年の和風造りで木彫の等身大キリスト像の聖堂再建にも。当時は壮年会も多数おり、夜はいつも懇親会になりました。司教様、酒を飲まない司祭も必ず付き合ってくれて、はまゆう会館の二階に宿泊されました。

個人的には七十七年は児童養護施設聖園天使園に勤め始めたころで、いばらの冠関係で高松に行き、九十年代は小教区の信徒会として新しい会館で司教様秘蔵のお酒を頂きました。九十六年の新司祭の派遣により、さらに教区との関わりも多くなりましたが、聖園天使園を退職するころ、司教様も退任されました。働き盛りが同じ頃でしたが、六十年代福岡スルピス神学院で雑誌「エスプリ」？を教材として教会外の話を講義されていた時が一番印象的でした。

深堀司教様　お帰りなさい
２７年間住み慣れた私たちの教会へ

桜町教会　和田　伸

司教様お帰りなさい。

告別式は愛に満たされた和解の場でありました。主の晩さんのようでありました。招かれた一人として賛美と感謝があふれ種々のことを想い起こしました。フランス・イタリアの巡礼のこと、徳島から桜町に転入した時のこと、病弱であった私はたくさんのみことばと励ましをいただきました。聖歌の席を勧められ、今もこれにとどまっていること等々。典礼にふさわしい者になりたいと思っています。

アシジ聖フランシスコ大聖堂にて

諸聖人と共に静寂のうちに

高松教区司祭　アントネロ・ヤピッカ

深堀司教は、「異邦人への宣教は、教区全体の司牧と愛の活動を統一し、収斂する原理となる」と言う教皇ヨハネ・パウロ二世の言葉に沿って、高松教区を二十七年間導いた。

彼は、第二ヴァチカン公会議の精神に基づいて、復活したキリストの見える体を目指す中で、キリスト教入信と継続養成の必要性を直観した。彼は、新しい福音化を推進する為に、故田中英吉司教が導入した新求道期間の道を評価し、奨励すると共に、その「道」から宣教家族を招いたが、それらの夫婦と大勢の子供達の証を通して、多くの日本人がキリストを知る恵みを受けている。

彼はまた、深刻な召命の不足を補う為に、ヨハネ・パウロ二世に強く励まされて、高松教区に教区立「レデンプトーリス・マーテル」国際宣教神学院を設立した。現在、日本と世界各地で、この神学院で養成された三十人の司祭たちが宣教している。二十年を経た今日、深堀司教の決意がどれほど予言的であったかは、幾つもの教区が、アジアの国々から神学生を迎えている事実からも知られる。

司祭団のサルベレジーナで送る

福音の種を蒔く為には、具体的な証が必要だ。深堀司教は理解されず、反対にあったことで苦しんだが、福音書にある通り、地に落ちて死んだ一粒の種になった。そのうえ、彼の教会への献身と、憐れみに満ちた沈黙は、この日本を霊的な殉教の血でぬらした。神のみ旨を受け入れ、純粋な愛をもって孤独のうちに歩んだ彼の足跡は、高松教区と日本の教会に残された最も価値のある遺産だ。

死の三日前、深堀司教はまどろみから目覚めて、訪れた三十名の高松教区の若者たちを迎えた。彼らは、一人の聖なる人と共に居ることを確信した。彼は、自ら洗礼を授け、信仰を育てた青年たちに、その祝福を通して、教会と福音のために捧げた自分の生涯の「バトン」を渡そうとしているかのようだった。

出棺を見送る参列者

園児達に暖かく接してくださった

桜町教会　河野千乃

私が長尾聖母幼稚園に勤務していた頃、司教様は入園式や卒園式によく来賓として出席して下さいました。

いつも園児達に暖かく接し、優しく語りかけて下さっていた姿が、深く思い出されます。

今では天国に先立たれた山下神父様と共に懐かしく語り合っていらっしゃることでしょう。

深くて長い継続養成の道

桜町教会　米澤南美子

古い革袋には古き良き酒が入る。しかし古い酒になれない者には新しい袋が必要。私にとってまさに刷新の革袋である「道」を用意して下さった深堀司教様。あなたの晩年のお姿を心に刻み、私もへりくだって小さな者としてこの「道」を歩み続けます。

ご自分の生命を惜しみなく捧げつくされた

桜町教会　田中洵子

深堀司教様はパウロのように戦いを立派に戦い抜き、キリストのように血の汗を流し、日本の教会、高松教区のために祈り続けられました。実にキリストのためにご自分の生命を惜しみなく捧げつくされた深堀司教様は、天国で勝利の栄冠をお受けになり、諸聖人と共に神様に賛美を捧げていらっしゃるでしょう。深堀司教様の短いながらも、いつも心を揺さぶられたオミリアや謙遜な主の僕の姿を思い起こしながら進んでまいります。

賛美と感謝をこめて。

エピソード六景

Aさん　平戸出身の私のことを「おお元気だったか」と、一回で覚えてくれて親しく声をかけてくれました。

Bさん　司教様のお母様が私の母と福岡大名町教会で親しくしてくれて、父の葬儀にも司教様がおいでくださり、またヨーロッパ旅行でも気軽に接してくれた。

Cさん　愛媛での献堂式の帰り、トッサカ峠でトッサカ饅頭を買い車の中で食べようとしたら、甘いもの嫌いな司教様は「待った」とバツとしてロザリオの祈り一環全部させられた。そこを通る度思い出す。

Dさん　堅信式の時、息子一人でボソボソ「この子の親はどこ？」「私」と言うと「おおアンタか」話しやすかったです。

Eさん　食事会の時、ゴボウのキンピラが食べたいということで牛肉を入れて張り切って作ったら、後で「ゴボウだけのがよかったんよ」母親の懐かしい味が欲しかったのでしょうね。

Fさん　このロザリオ、教皇様から回りまわって私のところに、と言う私に「さすっているだけではダメよ」